



元旦日中の本殿

平成十七年 初詣 三箇日で55万人が参拝



平成十六年のすべての災いを洗い流すかのような氷雨は、午前中で止んだものの寒気厳しい大晦日、一年を締めくくると年越しの大祓式・除夜祭が斎行され、迎春の緒準備も整い境内は暫しの静寂に包まれた。

元旦は降雪との予報、肌刺す寒風で身も引き締まる天候ではあったが、午後十一頃には、すべての駐車場も満車となり、当大社への続く沿道はヘッドライトの列がなくなった。同十三時〇分神門がその年に別れを告げるが如く閉ざされると、新年を宗像大社で迎えるようとする多くの参拝者が続々と石畳を踏みしめて参集。神門前と御本殿への参道は瞬く間に、開扉を今や遅しと待ち望む人々で埋め尽くされた。

漆黒の境内にライトアップされた本殿がくつきりと浮かび上がり、浄園の中を紅く揺らめき、また二つの篝火が赤々と燃え、人々を影絵のように映し出す風景は、幽玄

- ### 2月祭事暦
- 毎月1・15日 月次祭
午前10時 高宮祭
第二宮・第三宮祭
午前11時 総社祭
 - 2月 3日 午前10時 節分祭
於=祈願殿
※祭典後豆打ち式
 - 2月11日 午前11時 建国祭



神前で誓いを新たにする参拝者

の世界を感じさせるものがあつた。新年の到来を奏ぐ太鼓の音と共に開扉、神前には輝ける年への切なる願いをこめた参拝者が多数押し寄せ拍手と歓声とが鳴り響いた。東西の授与所には、交通安全・家内安全等のお札・お守り、縁起物の熊手・破魔矢・籬矢、干支の酉の一刀彫・絵馬等を受ける老若男女が殺到し社頭は息をつく間もないほどの混雑ぶりを見せた。本殿

社紋 「橘の葉」
宗像大宮司家の家紋であり、当大社の社紋。現在この御神木は本殿西側に樹齢五〇五年を経過し、今も変わらず参拝者を見守っています。

「忌詞(忌み言葉)」という発することを忌みはばかる言葉がある。婚儀での「去る」「切る」「戻る」が一般的だが、当大社の沖ノ島でも近代まで「女性をオトメ」、「死をクロヨウセイ」、「鳥をクロトリ」等の忌詞が使われてきた。これらは「言霊」といって、言葉には不思議な霊威が宿ると考えられてきたことによる▼「神職言挙げせず」。神職・神官・神主と呼ばれる職につく者は、昔から「口数が少ない」「多くを語らない」という観があるが、これだけ様々な情報飛び交う現代では、時として言葉を尽くさなければ、行き違いや誤解が生じる可能性が否定出来ない▼部署柄、外部からの様々な窓口をしているが、電話・FAX・電子メールと文明の利器のおかげで、事と次第によつては一切会わずに済んでしまうこともある。しかし、いくら言葉を並べても、直接会うことほど確実なものもない。事前のやりとりでは印象の悪い方でも、実際に会ってみるとすばらしい方で、その仕事振り、プロ意識の高さに時として惚れ込んでしまうこともある▼現代も「言の葉」は「言霊」であつて霊威が宿っている。しかしながら、社会人(神職)となり、社会・職場・社務に馴染むにつれて、妙に饒舌になりつつある今日、西洋の諺「沈黙は金、雄弁は銀」が胸に響く。(M・O)



神具・装束 結婚式場調度品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番

本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



御神前で祈る参拝者(2日)

では、本年も九州旅客鉄道(株)代表取締役社長 石原進氏以下約五〇名が昇殿し、新年一番祈願祭が斎行され、祈願殿でも本年一年間の交通安全を願う方々の祈願祭が執り行われた。

例年だと参拝者の波が途切れることのない元旦を迎えるが、本年は元旦午前中までは雪模様という天気予報の影響か、午前三時にはある程度落ち着きを見る状況であった。しかし、本殿では、家内安全、商売繁盛、厄除け等の祈願を申しこむ人が並び、地元総代の方々の御奉仕による神酒授与所も新年のお神酒を頂く人で溢れた。更に福みくじ授与所には今年の福運を願う参拝者が列をなした。

一方、祈願殿前の大駐車場は新年の

お祓いをうける自動車で埋まり、終日祭典の開始を知らせる太鼓が鳴り響いた。大駐車場に駐車することのできなかつた自動車は、神宝館横の第2駐車場、第二・第三宮下の第3駐車場に車を駐めてお祓いをうけるような状態であった。これらの車の流れをスムーズに手際よく鮮やかに誘導・整理できたのは特別に御配慮いただいた宗像警察署、また宗像市消防団の地元分団の協力に依るとこ

本年は四日から仕事始めの処が多く、正月期間も三日までの処がほとんどで、家族連れの参拝は三ヶ日に集中、二・三日の参拝は昼夜を問わない状態であった。四日からは、会社関係の参拝が多く、交通安全・業務安全繁栄・商売繁盛の願いと共に上向いたとはいえまだまだ厳しい経済情勢を受け、より一層の景気回復を祈る篤い願いがこめられた。七日頃からは近県の実業参拝もあり宗像



神門前の様子(2日)

ろが大きい。

元旦午前九時、本殿では本年最初の祭典である元旦祭が斎行され、新年を寿ぎ皇室の安泰、国家隆昌と氏子崇敬者の幸福とを祈念する祝詞が朗々と奏上された。

元日は、天候模様、道路事情のため参拝者の出だしが遅かったこともあり、午後から二日にかけての夜間の参拝が非常に多く、終夜体制で臨んだ社頭は例年にならぬ状況で、その対応に追われるほどであった。

	参拝者数	参拝車両数
元日	17万人	4.5万台
2日	21万人	5.5万台
3日	17万人	4.5万台
計	55万人	14.5万台

大神の御神徳をうけ、本年も輝ける年であるようにと願う参拝者で境内は大いに賑わった。

正月三ヶ日の参拝者数・車両数は左記の通りである。



福みくじ授与所前(元旦)



元旦午前零時の開門と共に詰めかける参拝者



本殿授与所(2日)



今年は例年よりはやく会社参拝が始まった(4日)



出光本社の参拝(8日)

福岡サニックスボムズ トップリーグ復活 必勝祈願祭

ととなった。

そこで来季は是非トップリーグで活躍していただこうと、今回宗像市は勿論、宗像市観光協会、田

熊山笠、神湊段天山笠、玄海未来塾、当大社で構成される市民応援団(代表 伊豆善也氏)が、宗像市の

チームであるボムズを全面的に応援しようとして開催された。

正月六日とはいえまだ初詣参拝者で賑わう境内に、忽然と姿を現した一九〇センチ、体重一〇〇キロという選手一行約五〇名が揃いのブレザーで闊歩する姿は、注目の的となった。

外国人(全てニュージーランド)選手も何人かいらっしやつたが、祈願祭が始まると全員神妙な面持ちで臨んでいた。

祭典終了後、宮浦成敏監督、遠藤哲主将が応援に集った市民を前に入替戦に臨む決意を述べ、市民を代表し伊豆

代表、駆けつけた地元選出の渡辺具能衆議院議員が激励の挨拶を行った。その後、一同当大社「五月寮」へ移動し直会。原田宗像市長、当大社神島宮司の挨拶の後、関係者で樽酒を開け、大鍋で煮炊きされた豚汁・地鶏のすきやき、また選手達がよく訪れる地元串店の主人を招いての焼き鳥に一同舌鼓を打ちながら、ボムズ選手と市民が交流を深めた。

一月六日、宗像市を本拠地として活躍するラグビーチーム「福岡サニックスボムズ」選手、監督、関係者が必勝祈願を受け、市民応援団、玄海ジュニアラグビークラブ等が応援に駆けつけた。同チームは一昨年トップリーグから降格、昨年はトップ九州リーグでプレーし無敗の成績を修めたため、一月下旬に開催される入替戦に駒を進めるこ



談笑する選手・市民応援団



必勝祈願祭

そして宗像大神の御加護の下、福岡サニックスボムズがトップリーグに復帰され、一同で勝利の美酒を味わうことを祈り散会となった。この原稿を執筆時点です、一月十六日に東京・駒沢で「セコム」と対戦し三十四対〇で完勝しており、次の同月二十三日に福岡・博多の森で行わ



決意表明をする宮浦成敏監督



勝利を祈念し一同で樽酒を割った

れる「トヨタ自動織機」との対戦に勝利すれば、来シーズンからトップリーグ復帰である。福岡サニックスボムズの今後の御活躍を、心より御祈念申し上げます。

『高宮参道』整備完成 『鎮守の杜の道』と命名

本殿から高宮齋場、第二宮・第三宮へと続く参道、通称『高宮参道』がこの度整備され、新年を控えた十二月三十一日に至て完成した。



鎮守の杜の道

高宮参道は昭和三十年に整備されたものであり、次いで昭和の大造営の一環としても昭和四十六年に、高宮参道と辺津宮境内とを結ぶ中間地域の道路造成工事が行われ現在に至っていたが、この度新年に向け、より多くの参拝者が高宮、第二宮・第三宮に御参拝いただくのと整備を行い、同所へ続くこの参道を新たに『鎮守の杜の道』とも命名した。



回廊を御覧になる出光昭介名誉会長以下出光役員

まず本殿から鎮守の杜の道とを繋ぐ参道に、(株) 弘江組の施工で総杉作りの回廊を新たに建設した。回廊入り口には出光興産(株) 出光昭介名誉会長直筆による『高宮参道』と記された扁額を掛け、回廊内に、高宮、第二宮・第三宮、鎮守の杜の道、を解説した写真パネルを設置した。また高宮にある『齋舎』も長年の

である伊佐奈岐宮・伊佐奈弥宮の古殿で造営され、第二宮が沖津宮(沖ノ島)、第三宮が(大島)の御分霊をお祀りしている。年末から雨・雪の降る不安定な天候が続いたが、新年この参道に日没とともに提灯と竹燈を灯すと、多くの参拝者がこの光に導かれるように鎮守の杜の道を進まれる姿を多く目にした。

経過でかなり老朽化していた為、今回改修して授与所とし、おみくじ並びに祈願割符を設置した。高宮齋場は、本殿の西南三〇メートルの宗像山中腹にあり、御社殿はなく神籬を御依代として祭祀が営まれ、辺津宮境内でも最も神聖な地である。

この高宮へと続く宗像山入り口に、第二宮・第三宮が鎮座する。伊勢神宮の別宮である伊佐奈岐宮・伊佐奈弥宮の古殿で造営され、第二宮が沖津宮(沖ノ島)、第三宮が(大島)の御分霊をお祀りしている。



齋舎



高宮齋場



神郡宗像

末社めぐり

三十七 許斐下津六御前(六所御前社)



宗像大社から南東方面に約六キロメートル、宗像ユリックスにほど近い、宗像中央中学校の南側に位置する宗像市大字久原字古崎の住宅地の中に、平成十四年三月に建立された石鳥居・石造狛犬・石燈籠・手水鉢が見えてくる。

御祭神は、宗像三女神(田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命)、彦火々出見尊、豊玉姫命、猿田彦命の六柱を祀る。宗像郡誌にある由緒によると、久原村 射場の本にある六御前社をもって、「宗像祭祀記二、下津六之御前トイヘルハ此ノ社也。許斐王子神社從神ナリ。明治四年(一八七二)故有テ六之神社ト改稱ス。宗像大宮司氏貞、元龜四年(一五七三)ニ社殿再建。宗像七十五社ノ一ナリ。」とある。



明細帳によると、「鎮座地を東郷村大字久原字古ノ崎とし、社名を六所御前社(舊村社)とする。由緒として古来下津六之御前といふは是社なり。」とある。現今社名は「六之神社」。西南面に覆屋付き小型の一間社流造、建立年代は安永六年(一七七七)大工は、元木村作之丞と棟札に記されている。拜殿は六柱大神廟の扁額が掲げられている。

境内神社は、保食神を祀る貴船神社・素盞鳴神を祀る須賀神社・應神天皇を祀る八幡神社・菅原神を祀る菅原神社の四社。三六四坪余の境内は良く清掃がなされており、小さなブランコや藤棚もあり、付近住民の憩いの場となっているようである。

決断力
その時昭和の経営者達は
瀧口凡夫

佐三は一九六六年(昭和四十一年)十月、社長を退いて会長となり、後任には弟の計助副社長を昇格させた。ときに八十一歳、創業いらい五十五年あまりの社長業であった。六年後には会長を辞し「店主」専任となっている。

社長をやめたあと情熱を傾けたのは、講演と「勉強会」であった。

講演は社長のころから、かなり頻繁に行っている。文章もうまいが、講演も筋が通りウィットがきいているので人を引きつける。

演題はいつも「日本人の世界的使命」であった。「対立闘争で行き詰まっている世界に、日本民族が伝統的に持っている互譲互助、和の徳を知らせること、それが日本人の使命だ」というのである。

佐三は敗戦のとき、ひとり廃墟に立って「愚痴をやめよ、三千年の歴史を見直し再建にかかれ」と呼びか

出光興産株式会社
出光佐三

店主
その18

新しい世紀と出光 ②

傘寿超え理念に情熱注ぐ



軽井沢の「勉強会」では、佐三が実践してきた「日本人の事業経営」についてさまざまな角度から議論された。

けた。それから二十年あまり、自らも八十歳を超えたが、次の世代を担う青年たちに語りかけ、本場の日本人の姿を探求しそれを世界に広めなければならぬ。それが、社業の第一線から退いた自分の仕事だ。佐三はそう考えた。「勉強会」

は、これまで自分の事業活動と思索を通じて練り上げてきた理念と主義、方針を、外の風に向けて鍛え直してみよう、というねらいだったように思う。夏の暑気を避けるため滞在していた軽井沢の出光寮に、数人の学者、ジャーナリストを招いて議論するかたちで行われた。

筆者は六八、六九年と、続けて参加した。同郷の幼友達で、当時店主室にいた麻生和正君(のち、専務)が誘ってくれた。新聞社の東京支社経済デスクで、四十歳になったばかりだった。生意気な年ごろだから、郷土の大先輩で有名な事業家と議論できるとあって、喜んで出かけた。

日程はだいたい二泊三日だった。佐三会長(注、この項では、内容が私的なかわり合いなので、佐三会長と呼ばせていただく)筆者)と同じ屋根の役員寮に泊まり、朝から晩まで議論した。これらの成果が「働

く人の資本主義(一九六九年、春秋社)や「日本人にかえれ」(七一年、ダイヤモンド社)の中の「奴隷解放」論などの出版物となった。

会長は驚くほど元気だった。目の手術前だったから、大きな懐中電灯を片手にとまじき資料に目を通された。日本経済新聞社の武山泰雄論説主幹(のち、論説委員長)、法政大学の森川英正教授(のち、慶応大学教授)など論客がいたが、会長はどこからでもかかって来い、という姿勢だった。

東京に戻ってから、続きをやるからと本社に呼び出されたり、来年はもっと元気のいい記者をつれてこい、とハッパをかけられたりした。

会長は座談の名手であった。そして、独特の論理展開がある。質疑応答をしているうちはよくわかっているつもりだが、あとになってハテこれはどう理解すべきだったか、などと迷うこともあった。

軽井沢で食事のとき、隣に座った筆者が目が不自由だからと思って、少しばかり世話しようとする「わかつとる」(よけいな世話をやくな)と叱られたりした。帰りの手みやげにまで、気を配ってくださったことも忘れがたい。

(続)

浜の寄物

189

いしただし



昨年(2005年)の福岡県最大のイベント国文祭も終わり、各市町村総括の段階であろう。福岡県への他県からの見学者が三百万人を突破して、過去の国文祭では最多と新聞で報じられていた。

さて十一月七日の谷川健一氏を招

いての講演”黒潮に寄り来るもの”には四百名以上の来聴者があり、谷



海底から引き揚げられた石弾

川氏俗学に聞き入った。講演が終わると、木下玖美子さんの柳田国男の「海上の道」と島崎藤村の「椰子の実」の朗読、そして日嘉まり子さんのヤシ笛とオカリナ吹奏がつづいて、会場は最高に盛りあがった。

松本敏郎氏のフライアンの手紙は英語の教科書に載ったものである。太平洋ひとりぼっち、のんびり波まかせ風まかせで、五年かけて高知県の浜へ漂着という黒潮のロマン。

安楽勉氏の壱岐市原の辻遺跡出土のヤシ笛の話は、日嘉さんのヤシ笛を聞いただけに、その音色が頭に残り、二〇〇〇年前の弥生の世界へ引きこまれていった。

石原渉氏の”てつはう”は長崎県・鷹島で表採された半円の陶製品、中に残っていた鉄片と泥は石化したような塊となっていた。その泥を分析の結果、あの”てつはう”であることが分かった。

蒙古襲来絵詞の名場面、教科書にはかならず載っているところだ。馬上の竹崎李長をめぐって槍、毒矢がとび、すでに愛馬は矢を受けて、どつと吹き出す鮮血、後脚をあげている。

李長の少し斜めに炸裂する”てつはう”がある。

「鉄砲ヲ飛バシテ、クラクナシ

鳴音オビタダシク心ヲマドヒ 肝ヲツブシ 耳目耳鳴ナリテ茫然トシテ東西ヲワキマエズ」 「八幡愚童訓」はそう記している。

国文祭では鷹島から表採の”てつはう”と海底調査で引き揚げられた半円の”てつはう”片と、石弾(写真)一個の三点を借りて展示した。

その横には複製の蒙古襲来絵詞の”てつはう”の炸裂する李長奮戦の場面をひろげた。描かれた炸裂する”てつはう”と李長の絵から、本物の

”てつはう”を較べてみても、大きさはほぼ同じくらいで、絵は正確で



”てつはう”

ある。ただ”てつはう”の部分や李長の後の松や、李長の前面にいる三人の蒙古軍は後で描いたという説がある。若しそれであっても絵詞が描かれてから、そう古くはない。まだ人々の記憶にあった頃と思われる。

石弾は大中小と三種類があり、直径一五〜六センチほどで、大きなものは二〇センチ以上のものもあるという。手で投げられるものではないようで、”てつはう”と共に投石機を使って発射した可能性がある。この事については次号で触れたい。

第五二二回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日×切



田野 森 甲子
 白内障の手術ののちの明るくて老いも病も乗り越えゆきたし
 (評) 光と視力を再び得、生きる気力をも得た、よろこびのうた。

朝野 藤井 浩子
 幼き日いつも泊りに行つたね芥川賞あと二歩の君先に逝きたり
 (評) その才を期待していたのに志半ばで逝つた幼馴染に呼びかける沈痛の挽歌

大井 木原 ふさ子
 あと幾度磨くにあらむ重箱の家紋の三つ帆入念に拭く
 (評) 家の格式を思わせる三つ帆の紋、それを守り伝えるのが、血統をひかない嫁であることの不可思議を感じさせる一首。

大島 杉田 禮子
 あらかぶの煮付けぎんぼうの天麩羅と夫の釣果に夕餉たのしも
 (評) 公職を退き得た夫の暇、釣果は大したことないかも知れぬが、それを見守る作者の温い目差しがある。

福岡 香月 照子
 如月に生まれしわれは雪が好き冬のソナタの雪にあこがる
 (評) 誕生月と雪と冬のソナタの三点セットで時代相をうまく生かした一首。

池田 森 龍子
 庭隅の箒届かぬ岩陰に落葉溜まりて時雨を誘ふ
 (評) 溜つた落葉に降る時雨の音を「誘ふ」とは、うまく言い得ている。巧者の歌。

津屋崎 佐々木 和彦
 新風舎より我が歌集の「カフェテラス」届きし夜は寝付けざりけり
 (評) 「新風舎」「カフェテラス」と二つの固有名詞が、リズムの上でやや固い感じを与えるが、第一歌集を上梓したよろこびが素直に詠われている。慶祝至極。

日の里 石松 弘次
 疎遠せる友の甲い風寒しお詫びを裡に手を合わすなり
 (評) 三句「参列し」を「風寒し」と直し、うたにふくらみと言外の悲しみを与えたと思つが、どうだろうか。

福岡 井田 有久衣
 西安のホテルの売子片言で「安くするよ」とマフラー差し出す
 (評) 中国で聞いた思いがけない日本語に作者は恐らくマフラーを買ったことだろう。たくまじきかな商魂。

田野 森 つるの
 南天の実は重たげに傾きていよいよ赤く庭を飾りぬ
 (評) 結句「彩る」とせず「飾りぬ」とした処に工夫があり、庭を愛す作者の心意気が伺える。

福岡 中村 勇
 畑仕事も趣味の短歌も実の入らず籠る日多し九十を過ぎ
 (評) 長い間畑仕事と短歌を振り廻し愛してきた作者ならではの感慨である。こ自愛を祈る。

福岡 池浦 千鶴子
 新郎の幼さのこる挨拶に和みの生れ街は秋空
 (評) 結婚式の厳肅で緊張な雰囲気を一瞬なごませた挨拶、四五句の畳みかけるリズムでうまく詠っている。

田熊 有田 ゆり子
 風ざわたる海を見下ろす岬道石路の花ひかりを反す
 (評) 暖かかった今年の初冬の風景をおおらかに詠い取っている。

浮羽 向 則正
 妻をらぬ三日を幼あづかりて料理洗濯子守りもこなす
 (評) 俄やものを三日間さそお疲れだつたらう。素直に詠んだ処がいい。

鐘崎 安永 久子
 創作の手編染しみ熱き茶を飲みつつはづむ友との会話
 光岡 佐藤 純一
 三人衆全てそろいて知恵と徳は文殊菩薩はおんけいありや

日の里 大和 美由紀
 小春日の海に向きゑてやはらかき笑みのこぼるる海女の像立つ
 選者詠
 コンビニに買ひきて朝の食事する駅前ホテルしぐれ雨降る
 靴よりこもり取り出し宿を出づ予報通りに京は雨なり
 岬山にのぼりゆく道点々と白し遅咲きざくら



宗像大社歌会 俳句作品集(四九七)

福岡 森 清
 下校子の紅衣輝く川小春
 光岡 井上 嘉治
 朝風呂に屠蘇の香りも失せにけり
 東郷 田中 憲象
 御代の春社に二宮三宮
 日の里 花田いつ枝
 名ばかりの雪見障子の軋みけり

編集後記

弊紙「画下」の神職で順番に廻っていますが、先々月位から若い神職まで順番が来ており、小生も今月初めて書きました。決められた文字数に収めることに苦勞しましたが、結構楽しんで書きましたので、御覧下さい。尚、補正というか、一応断りを入れておきます▼小生「沈黙は金雄弁は銀」が胸に響く」と古代ギリシャの諺で結びましたが、当時金は砂金など自然に採れるが、銀は精錬が難しかった為、金より銀の方が高かったようです。そして当時の意味は「沈黙は時として有効な説得力を持つが、弁論や論説の説得力には及ばない」という意味だったようです▼広辞苑には「沈黙の方が雄弁より説得力がある」と載っています。小生もこの意味で使っています。念の為▼この余滴にテーマはありません。あくまで余滴です。ただ、神職であり、神社の新聞ですので、「日本の伝統」「神道教化」が編集者として触れていただきたいキーワードです。同じ神職でも、それぞれの個性がよくみえますので、今後も御期待下さい。(M・O)

〒811-3505 福岡県宗像市田島
 電話 0940-62-1311(代)
 発行人 伊藤佳和
 編集人 大塚宗延
 制作 ジーエータップ
 印刷 セネラルアサヒ

所務社 宗像大社
 発行所 宗像

定価1年送料共1,000円